酒野晶子氏インタビュー報告
企画展示「中村順平―建築芸術家のドローイング―」の当時をふり返って

酒井一光 / 澤井浩一

平成 3 年（1991）に、中村順平の展覧会を公立博物館として初めて企画・開催した酒野晶子氏（天理大学非常勤講師）に、当時の様子をふりかえっていただくインタビューを行ったので紹介する。

■開催概要

・日時：平成 30 年（2018）5 月 24 日（木）14：00 ～ 16：00

・開催場所：大阪歴史博物館応接室

・参加者：酒野晶子氏、青木祐介氏、海老名熱実氏、林要次氏

・司会：酒井一光

■インタビュー内容の紹介（敬称略）

酒井：　本日は東大阪市立郷土博物館で平成 3 年（1991）、企画展示「中村順平―建築芸術家のドローイング―」展を開催された酒野晶子さんにお越しいただき、当時の様子をうかがいたいと思います。まずは、酒野さんの自己紹介を兼ねて、専門分野や担当された展覧会などのお話しをうかがえればと思います。

酒野：　私は東大阪市に生まれ育ちまして、高校は大阪市立工芸高等学校写真工芸科を出ました。工芸高校時代、写真科にいたのですが、クラブで「古い建築をみて歩く」というクラブに入っていました。建築科もあったので、山本祐弘先生という彰国社の『日本建築史』という本を出された先生がいらしたので、そこに入れてもらいました。メンバーに村野（藤吾）先生の崇拝者がおりまして、学校が近いので、村野・森建築事務所の前を通って帰るようになりました。そんなわけで、建築のことにも興味がありました。

青木：　工芸高校は校舎も古かったのではないですか？

酒野：　古い煉瓦の建物でした。

酒井：　大正 13 年（1924）竣工で、大阪市指定文化財になっています。

酒野：　工芸高校の写真科を出たのですが、写真が最後まですきになれず、就職は写真関係にはいかず、髙島屋に勤めました。何年かして体をこわしてしまい、長く勤めるため公務員試験を受けるつもりで、アルバイトをしたのが東大阪市教育委員会の文化財担当係でした。当時の文化財担当は旧枚岡市で「枚岡市史」編さんに関わっておられた藤井直正さんでした。私は中学時代から地元の郷土研究会の会員で、ご指導を受けていたことから声をかけていただきました。たまたまその時に博物館の建設が進んでおりまして、専門職としての公務

員試験をうけてみませんかといわれ、学芸員の資格はまだ持っていませんでしたが、受けてみると合格してしまいました。私の父は寺の住職の息子だったのですが、寺を継がずにガラスのグラヴィールという分野の作家をしていて、文化財にも興味を持っていたので、考古学の末永雅雄先生や上田宏範先生と交流がありました。そんなわけで、父が奈良の仏像や古い建物などの文化財をたくさん見せてくれました。家の中で雑談の様な内容が、たまたま試験に出たんです。学芸員補から出発しましたが、大阪市立博物館や奈良国立文化財研究所の先生方、末永先生などと知り合いだったもので、親切にご指導いただきました。入ったのは東大阪市立郷土博物館ですが、いずれ縮小されることがないようにということで登録博物館になっていました。実情は小さい貧しい博物館でした。みんなの手弁当で頑張っている感じの博物館でした。私は写真科を出ていたので、写真の引き延ばしをやったり、考古資料で真っ黒になった出土木製品の凸凹をちゃんと出せるように撮ったりしていました。

酒井：　ちょうど写真の知識が活かされたわけですね。当時、東大阪市郷土博物館ではお２人だけだったのですか？

酒野：　その頃は開発が激しい時代だったので、建設に伴う埋蔵文化財の発掘件数も多く学芸員も増えていきました。小さい館でしたので特別展示は年２回くらいしかできなくて、あとは常設展示と予算もあまりつかない企画展をしていました。

酒井：　年に特別展１回と企画展２回くらいでしたか？

酒野：　企画展は、１回も出来ない年もありました。オイルショックの時などは、特別展の予算が切られたこともありました。常設展示で資料の入れ替えをしてしのいだり、子供たちの体験学習をしたり、郷土史講座など自分たちでできることをやっていました。

青木：　他に考古学の方が２人いらっしゃったということですが、そのほか歴史全般をみる人はいたのですか？

酒野：　そこはもう無理なんですよね。展示の分野では、考古学の展示か民俗の展示しかできませんでした。東大阪市は昭和 42 年（1967）に布施市・河内市・枚岡市の３市が合併して出来たため、文化財の調査を早くからやらなければという下地がありました。東大阪市は江戸時代から木綿の栽培が盛んでして、開館以前からの河内木綿の民俗調査、緊急調査が実施されていました。その時に木綿関係の資料がたくさんあり、博物館で収蔵して公開していくことになりました。私は木綿関係の展示を博物館で何度かやってきました。木綿ばかりでなく、地場産業の水車など、民俗関係の資料収集や展示を担当してきました。

酒井：　木綿や民俗の展示をやられる中で、平成３年（1991）「中村順平展―建築芸術家のドローイング―」という展覧会を担当されたわけですね。その辺のご縁とかをお話しいただけますか。

酒野：　東大阪市郷土博物館では、民俗か考古学関係の展示ばかりだったので、皆さん驚かれたと思います。当時、国立美術館でも建築関係の展示はやってない頃ですよね。博物館では郷土、東大阪市あるいは河内国に関わることをやるということが約束事でした。中村先生のご家族のことは、枚岡市史編さんの中で市と関係ができたようです。中村家のあるのは、東大阪市の池島町というところで、中世までさかのぼる歴史がある土地でした。さらにさかのぼると、条里制の遺構が残っているところなんです。村の周辺の人が住んでいない田んぼなどに条里制の跡が残っているということで、枚岡市史編さんの時や私たちがアルバイトをしている頃に、発掘調査もされました。

そんな古い地域の中で、古くから続いてきた家のひとつが中村家でした。ここで関わってくる中村順平のお兄さんが、ご本家の当主で、当時、本人はすでになくなられ、奥様がご当主となっていました。聞くところによるとその中村家は非常に広い屋敷だったそうですが、戦後にはいろいろあって手放されて、その一角に住んでおられたということだったんです。大阪市内にも家があったようで、中村先生は大阪市内で育っておられます。本家となるのは池島の家だったのですが、なかなか不便なところで、学校へ行くのも大変な所でした。この後、中村順平とかかわられる美奈子さんは姪御さんでいらっしゃられる、つまり長男のお嬢さんです。その方が池島に代々住んでおられて、後継ぎとなるお父様が先に亡くなられて、4 姉妹と、お母さま（中村先生からしたら義理のお姉様にあたる長男のお嫁さん）が残られた。枚岡市史編さんの時にはお母様がお元気で、編さん室の方がいろいろなお話をさせていただいたり、古文書などを調査させていただきました。その後、古文書は東大阪市の指定文化財となり、今の中村家は早逝された美奈子さんのお兄様の家系になっています。

その時に、中村家と同じお家だったのですが、冨家（ふけ）家という家があって、中村家からどなたか子供さんが継いでらした。同じ池島の中に屋敷が 2 つありました。ところが、中村家も逼塞してしまわれたので、一本になって中村家だけになったのですが、私が知り合った当時はお母様とお姉様たちは中村さんで、3 番目のお嬢様だった美奈子さんが冨家家を継いでいらっしゃった。そんなわけで、冨家美奈子さんというお名前でした。家に残った文化財も大切にしなければという思いもおありでした。ほかのお嬢様方は、勤めておられなかったようです。外に出て勤めていらしたのは、美奈子さんだけでした。枚岡市史以来、文化財の担当だった藤井直正さんに美奈子さんが文化財の文書の取り扱いについて相談に来られたりしていましたので、私も存じておりました。その後で、中村先生が勲章（1976 年、勲三等瑞宝章）をもらわれた翌年ですか、テレビに出られていました。

酒井：　そうですね。NHK の「スタジオ 102」という番組でした。

酒野：　「スタジオ 102」という朝の全国番組の中で、中村先生がインタビューに出られたんですね。美奈子さんは、テレビ出演以前に、中村先生が高齢になられ、お世話をするために隣に住まわれたと伺いました。

酒井：　アトリエと家を兼ねたようなところでした。

酒野：　そのときに私がたまたま見てまして、美奈子さんが映っておられたから、私は「えっ」と思ってびっくりしたんです。そしてそのあと文書をどうしたらよいかというご相談にこられたとき、中村先生がテレビに出てらしたことが話題になりました。

（以上は酒井によるインタビューまとめ、以下は澤井が担当）

海老名：NHK「スタジオ 102」に美奈子さんも出演されていたんですか。

酒野：　出演というより、アナウンサーが尋ねている時に、室内でお茶を出したか、下げたかというくらいのことでした。中村姓なので、親類の方かなと思っていたら、その後、美奈子さんが資料のことで（博物館に）相談に来られたので、「このあいだテレビに映っておられましたね」と言ったら、「そうなんです」という感じだったんです。私があの時に番組をみていなかったら、わからなかったですね。

先生のそばで美奈子さんはいろいろお話を聞かれたり、池島のことなどを話合われたようです。先生は池島に帰る決意をされ、好みに従って住居を建て直されました。玄関に観音開きの板戸がある、こじんまりしていましたが風格ある建物でした。

残念なことに、新居に移る前に先生は他界され、ここで暮らされることはありませんでした。美奈子さんはそばで暮らされた間に、先生の関係資料の貴重さに気づかれ、保存しなければとの強い思いに至られたようです。

アトリエの作品や蔵書、愛用の家具などできる限り池島に運ばれたようです。壁を飾っていた大きい写真パネルや先生のポートレートのパネルもありました。

大移動が済んで間もなく、先生の資料を地元で公開できないものかと考えられたようです。そして、以前から関わりのあった私どもにご相談されました。本来、美術館で実施する内容であるとわかっておられた上でのことでしたが、当時はまだ建築関係資料の展示は難しかった時代でした。

ご相談を受けた私どもでは、展示分野から外れるものの、郷土ゆかりの方の優れた資料の公開ということで前向きに考えることになりました。

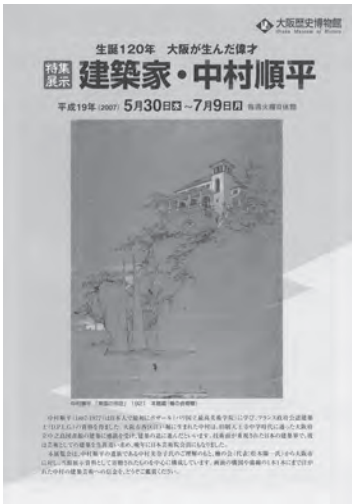
まず資料の調査をしてからということになり、私が担当するということになりました。先生のご経歴からぜひ公開したいと思いました。ご家族の思い入れが強い資料でも展示に不適当ということもありますので心配でしたが、想像を超えるすばらしい内容でした。小規模な展示であれば可能だと確信しました。ただ、大部分は紙筒に入った状態や移転の梱包のままの資料で、一通り調査するのに時間がかかりました。私がお伺いできる日も多くはない上に、当時、病を抱えておられた美奈子さんの体調もあり、予備調査だけで何年もかかったと覚えております。

美奈子さんが介護を必要とされるようになった時、中村家は 20 年ほどしか経っていないお家でしたが、介護しやすいように建て替られました。中村先生の資料も建て替えた家

の２階、屋根裏の倉庫に保管し、大事にしてくださっています。

横浜関係の資料は、お弟子さんたちが高齢になって手放しますということになったので、こちら（大阪歴史博物館）に入っているので、ありがたいです。そういうことは、酒井さんがここへ赴任してくださったからだと思いますね。そのタイミングも本当によかったと思います。檜の会（お弟子さんたちの会）の動きと、私たちが伊藤廣之さん（当時、大阪歴史博物館）にご相談したのとが、ちょうど重なりましたからね。それでも昔の（大阪市立博物館の）学芸員のメンバーだと、取扱いを美術工芸の人が面倒見てくださるといいのですが、ちょっと分野が違うじゃないですか。天王寺の大阪市立美術館とも関係がない訳ではないのですが、扱われる分野が違うので、結局預かってもらうことはできず、資料が宙に浮いていました。

酒野：　美奈子さんも受け入れ先を探しておられたから、横浜のお弟子さんたちの資料が大阪歴博に入りましたよとお伝えして、展覧会（特集展示「生誕 120 年 大阪が生んだ偉才 建築家･中村順平展」平成 19 年（2007）5 月 30 日～7 月 9 日）の時も、車椅子で見に来てすごく喜んでくださった。



酒井：　中村順平の展覧会を、東京でお弟子さんたちが企画されて小田急のギャラリーとかいくつか開催されたと思うのですが、公的な博物館とか美術館でされたのは、酒野さんの東大阪市立郷土博物館が初めてではないかと思います。非常にその意味でも意義が大きいと思います。

酒野：　不十分な展示だったとは思いますし、本当は展示の後、安心なところに収蔵してというのが、あるべき姿だったと思います。

酒井：　東大阪の中村家のことを一番よくご存知だと思いますので、ご質問があれば。

（展覧会記録とその後の展開について）

■酒野晶子氏が企画・開催された展覧会の基本情報（当時の報道発表資料より）

展観名称　企画展示「中村順平―建築芸術家のドローイング―」
会　　期　平成 3 年（1991）10 月 22 日～12 月 23 日
会　　場　東大阪市立郷土博物館　小展示室
主　　催　東大阪市教育委員会
関連事業　11 月 10 日　記念講演会「中村順平とその時代」
　　講師　南原七郎（元武庫川女子大学教授）
　　12 月 1 日　ミュージアム・コンサート「大正、昭和のジャズの調べ」
　　おはなしと演奏　岩井ゆき子
展示内容　「南国の別荘」ほか、エコール・ド・ボザール留学時の作品、山口銀行本店ほか壁面装面装飾原図、アフリカ航路汽船船内装飾設計図、如水会館設計図及び写真、デザインノート、講義ノート、原図をはりつけた製図板など、石井柏亭画の中村順平像、スナップ写真や記念の品など（展示替えあり）

青木：　私は横浜市の博物館にいるものですから、今のお話にいろいろと共感できるところが多くありました。この展覧会をきっかけに、地域で、たとえば池島で中村順平の名前が有名になったり、郷土の偉人ではないですけれども、この地の出身のこんな人がみたいな形で再評価がされていくということは、ありませんでしたか。

酒野：　あまり聞かないと思いますね。道で出会ってもお話しもしなかった一部のご近所の方が博物館へ行って、「お宅の叔父様に、素晴らしい方がおられたんですね」と言われたと美奈子さんはおっしゃっていましたけど、ただ地元で大きく事情が変わることはなかったですね。

青木：　その後、博物館で中村順平をもう一度取り上げるとか、そんなこともなかったのですか。

酒野：　東大阪の学芸員の専門分野だと、考古以外は企画しなかったのではないかと。

青木：　収蔵資料ではなかったということも大きかったですか。

酒野：　はい。建築資料専門の学芸員がおりませんし、私もいつまでもいるわけではありません。東大阪市で寄贈を受けることは適当でないと、美奈子さんはご了承しておられました。それとやはり費用の面でもそんなに事業費の予算がないので。

青木：　当時、展示室の記録写真は撮っておられましたか。

酒野：　撮っていましたが、多分、美奈子さんに差し上げてしまったと思います。また小型（名刺サイズより小さいものも）の紙焼写真が多かったので、複写して展示に使いました。展示に使ったものはネガも含めて、資料返却時に美奈子さんにお渡ししました。指定管理者制度の話が出始めた頃でしたので、資料については引き継ぎできるけれども、その他の資料については引継が難しいので、ポスターも保存していないような気がします。本来、そんなに保存年限って長くないでしょ。

青木：　公文書についてはそうですね。

酒野：　行政的にいうと、保存しなくてもいいのですが、私たちの頃は、とにかくどんなことで必要になるかもしれないということで、展示関係は全部保存していました。でも、それが指定管理になると微妙なことになっていると思い、今回の（インタビューの）資料として、展覧会の人数とかを聞きに行きにくかったので、博物館には行かなかったんです。

青木：　直営から指定管理になって、いろいろ変わってしまっているんですか。

酒野：　はい。今の学芸員は考古の方ばかりですし、おそらくこの展示（歴博の特集展示）も観に来られていないのではないかと思います。

（展覧会タイトルについて）

林：　展覧会のタイトルは、日本芸術院会員だったということから「建築芸術家」としたということでしょうか。

酒野：　『建築という芸術』というご本がありますが、美奈子さんも賛成してくださいました。タイトルはみんな、私が勝手に考えるんですけど。（笑）スケッチを、エスキースという言い方をされて、スケッチという言い方されないですよね。中村先生はエスキースとかいう

言い方をされていて、ドローイングというのも、たぶん美奈子さんとの話のなかで、一般の方に向けてわかりやすくするために出てきた言葉じゃないかなと思います。ともかく描いた絵ですよというのを、作品とか、作品展とかいうのも嫌だったので、描かれたものという意味でドローイングという風にしたのだと思います。

タイトルの文字も、考古学の学芸員の菅原章太さんにお願いしましたら、隷書体のすてきな文字を書いてくださいました。黄褐色の上質紙にセピア色の文字で印刷し、いぶし銀色のシルクスクリーンで檜の会のマークを手刷りしました。

マークが少々ずれてもいいようにレイアウトしたような気がしますね。だから刷りやすいんですよね、ピタッと合わさなくてもいいから。日付とかの情報を全部載せないといけないでしょ。面白かったと思いますけど、かすれたり、きれいな色が出て、広げて乾かしても、なかなか乾かないんです。

青木：　300 枚を手作りってすごいですね。

酒野：　あの時は大きいサイズでなくて、少し小さめのポスターだったと思います。何もなかったら自分でしないと仕方がないというのが、私の出身校の校風だったので。無いよりは有った方がいいじゃないということで、一色刷りよりはいいのかな。

青木：　そのポスターもいずれ展示資料にできるんじゃないですか。

酒井：　昔のポスターは、単色とか二色刷りが多くて、昔の大阪市立博物館もそうでした。

酒野：　費用的にしようがないですよ。

酒野：　私、東大阪市民美術センターに異動してから、カラーのポスターを作ることができるようになりました。ポスターを作るのは好きだったのですが、中村先生の展示ではカラー印刷ができない。お送りして掲示してくださいますが、アート紙の光る紙だとみんな一緒じゃないですか、だから光らない紙を使ったんです。アート紙に二色刷りだと、すごく可哀そうに見えるんですが、上質紙だと比べられないですし。カラー印刷も増えてた時代ですからね。その手作りポスターを兵庫県立近代美術館で見つけてご来館くださった方がおられました。

酒井：　ほんとにポスターが残っていたらいいですね。

酒野：　ほしいと言われたので、美奈子さんにはお渡ししたと思いますよ。

酒井：　家に残っていたらいいんですけどね。

酒野：　それこそ古い紙なので捨てられている可能性がありますね。

（作品展示について）

酒井：　酒野さんが、展覧会を開催された時は、主に建築の資料で。船の展示、船の作品も展示されましたね。

酒野：　川島織物史料室に図書を借用に行きました。資料のことなどは、織物関係の髙野（こうや）昌司さんという先生にお聞きしました。

海老名：中村順平先生が設計した船の織物を展示したのですか。

酒野：　内装のパースなどが載っている、中村順平さんが設計した船の、あれは何ていうんでしょうか。

海老名：スケッチか、水彩画ですか。それとも、インテリア画集ですか。

酒野：　はい。その画集（三菱重工業株式会社船舶技術部編『豪華客船インテリア画集』アテネ書房、1986 年）、はどこで所蔵されているかと調べたら、結局、川島織物さんの史料室でご所蔵だったんです。高価そうな本なので貸していただけるかなと、ヒヤヒヤしながらお借りしました。

酒井：　その他に美奈子さんの所には（資料はありましたか）、その当時はわからなかったんでしょうか。

酒野：　それ（出品された資料）以外には（中村家には）なかったのではないでしょうか。あった資料は全部出しましたしね。青写真もありました。写真も複写してパネル展示したりしましたし。戦災で焼失した岩崎邸（東京･岩崎小彌太邸）や如水会館の写真もあったんですよ。

酒野：　その後いろいろあって、ご親族の手で、（中村家を）建て替えることになり、家財道具を仮に置いておくだけでも大変なことですよね。

酒井：　ミケランジェロのでっかい写真とか。

酒野：　元の中村先生のアトリエから運ばれた写真で、2 畳ほどの大きさがあったと思います。先生のお好きな彫刻の写真だったそうです。よく運んでこられたと思います。大き過ぎるので、バリアフリーに建て替えられるときに処分されたかもしれませんね。

酒井：　一度、東大阪市の方が入られて、ちょっと整理をされたみたいですね。

酒野：　あれは市史史料室なんです。

酒井：　郷土博物館の展示室でそれだけ資料を出されて、なおかつ写真パネルまで展示されたので、すごく見ごたえがあったんじゃないですか。

酒野：　興味のある人にはですね。本来の郷土博物館のお客様は、やはり歴史系が好きな方が多いので、その人たちはあまり反応してくれなかったかもしれません。初めてで、最後というお客様も多かったかもしれません。村野・森建築事務所の方や、愛知県から 80 歳代の男性もご来館になりました。初めての分野の展示であったため、南原七郎さん（武庫川女子大学・お弟子さんではなく、中村先生の大ファンですと話されていました）の講演会とともに、地元在住の岩井ゆき子さんのジャズコンサートも開きました。おかげで初来館の方が多く、ずっと電話で道順を説明していた記憶があります。

酒井：　もう少し顕彰の気運があったら。少し時期的に早かったのかもしれませんね。これが十年後だったらかなりよかったかも。

酒野：　そうですね。あと、パリの 3 点の資料がありますよね。あれはそのまま（中村家に）置いておられたので、美奈子さんがまだ元気なときにお願いして、平成 9 年に市民美術センターがオープンの時に、あの 3 点をご出品いただきました。

私は、平成９年（1997）から昨年の３月の退職まで、市民美術センターにいたんです。美術センターを作って学芸員を新規採用できないから、現職員から異動になって、急遽行くことになったんです。

中村順平　塔のスケッチ
大正 11 年（1922）大阪歴史博物館蔵

酒井：　パリの３点とはどの資料でしょうか。

酒野：　「塔のスケッチ」などです。

酒井：　あの資料が中村家にあったんですか。
当館に、檜の会さんから寄贈いただいています。「塔のスケッチ」というのは３つの鐘楼を描いた作品のことですね。

酒野：　郷土博物館の展覧会で借用して、美奈子さんのところへすべての資料をお返しした後に、パリの３点、「塔のスケッチ」と「パリ市大学街日本館」・「南国の別荘」の３つ（現在は大阪歴史博物館蔵）を、平成９年に再びお借りして、市民美術センターの１階のガラスケースに２週間ほど展示したんです。その後、横浜の檜の会の大きな催しがあって展示されたのでしょうね。横浜に運ばれて行ったから、幸いなことに大阪歴史博物館に入ったんですね。

酒井：　それらは当時は東大阪にあったんですか。

酒野：　中村家にありました。床の間のような所に立て掛けてあって、郷土博物館が展示をする少し前に外国へ出品していたようで、すごく大きな梱包で戻ってきていました。それを博物館が借りてお返しして、暫くずっと美奈子さんのところにあったということです。

酒井：　パリのポンピドゥーセンターで開催（「前衛芸術の日本 1910-1970」展、昭和 61 年（1986）

中村順平　パリ市大学街日本館
大正 12 年（1923）大阪歴史博物館蔵

中村順平　南国の別荘
大正 11 年（1922）大阪歴史博物館蔵

12 月 11 日～ 1987 年 3 月 2 日）したようなことを、東京･池袋にあったセゾン美術館（「日本の眼と空間 - もうひとつのモダン･デザイン」平成 2 年（1990）9 月 8 ～ 24 日）でもやっていて、「パリ市大学街日本館」･「南国の別荘」は出ていると思うんです。おそらくそのような機会に、檜の会の方に作品が運ばれたんじゃないかなと思います。

酒野：　そのまま置いてあったら、日の目を見ていなかったでしょうね。檜の会に感謝しないといけませんね。市民美術センターでもう一度展示させてもらった時は、当然、美奈子さんも見に来て、喜んでくださって。博物館とは少し違ったお客様に見ていただきました。

酒井：　それは存じませんでした。

（墓について）

酒井：　中村家のお墓が往生院六萬寺（東大阪市六万寺町）にありますね。門人墓というか。

酒野：　古くからあるのは、先祖代々の墓と、先祖のお一人の門人たちが建立した「中村先生之墳」という大きい墓碑があります。先生はその写真を見てとても気に入られたそうです。先生の没後、美奈子さんは字体も形も同じような墓碑を建てられました。

酒井：　やっぱりその辺が（中村順平の紹介から）抜けてることがちょっと美奈子さんにとっては。

酒野：　はい。残念だったようですね。

酒井：　網戸武夫さんの本（『情念の幾何学―形象の作家中村順平の生涯』建築知識､1985 年）では、広島の墓（龍華寺：広島県世羅郡世羅町）だけが紹介されているのでは。

酒野：　お墓のことだけに、とても気にされていました。

林：　今日は実は中村順平の命日なんです。5 月 24 日（1977 年 5 月 24 日逝去）なので、そういう縁なのかなという不思議な感じがしています。

酒野：　何か不思議なご縁と思いますね。

酒井：　最近になって、やっと若い研究者が興味を持ち、展覧会を当館でも開催しましたけれど、他でも火が付かないかなと思っています。

酒野：　やっぱり、その火付け役は大阪歴史博物館と酒井さんですよ。

酒井：　東京駅に、昔の RTO の壁面彫刻が一部保存されています。赤レンガの場所に昔はあったんですけど､少し離れた京葉線地下ホームから改札を出た不便な場所にあります。この前、ステーションギャラリーの方から連絡いただいて、その壁面彫刻を調査したんですが､（先方から）当館にその原画（「東京駅 RTO 待合室壁面彫刻下絵」）があると聞いたんだけれど写真を提供してほしいと言われました。

酒野：　そうですか、よかったですね。

酒井：　まあ少しずつ何か注目を浴びていけばと思います。

酒野：　今日は、中村先生の資料のことを気にしていただいてる方が 3 人もいらっしゃったんだと思うとうれしいです。東大阪では反応がなかったですね。無理はないですけど。

酒井・一同：本当にいろいろとありがとうございました。